

巻 頭 言

秋田県立大学システム科学技術学部

学部長 松本 真一

私の専門は建築環境工学で、研究活動の主要なフィールドは「日本建築学会」である。建築学会には、①世界に誇れる独創的・先駆的な研究開発に関する論文集と、②地域固有の問題を合理的に既存技術で解決した最新成果の報文集があり、両方とも査読付きで業績として高く評価される。①のような学術的研究雑誌に加えて、②のような直ぐにでも応用価値のあるレポート集も大切にされているというのは、他の学術分野の方には不思議に映るかも知れない。私には、この姿勢は建築というものづくりが基本的に単品であることに由来すると思える。是非、①に対応する「日本建築学会環境系論文集」と②に対応する「日本建築学会技術報告集」を Web 検索して、数編の pdf をご試覧いただきたい。②の媒体には査読員とは別の者による「報告の価値」に関する短文の論評が付される。この論評の仕組みが新鮮に映るかも知れない。

さて、本学の Web ジャーナル B である。私は、その媒体としての価値には上記の②の報告集と等価なものが含まれると見たい。地域でさらなる応用が可能な技術的知見の宝庫と言える媒体であってほしいし、地域貢献活動由来の成果で速報性の高い報文も、学術誌論文に劣らないとする価値観を書き手と読者で共有したいと心から思う。かつて本学の優秀な若手研究者が、「地域貢献活動の重要さは判るが、研究者として一番の実績となるのは論文である。論文にならないような地域貢献活動は自分にはどうも…」と漏らしたことがあった。その時、私の研究領域に②のような媒体がある幸せを感じるとともに、こうした媒体を持たない学術領域に属する研究者にとって、Web ジャーナル A や B はその役目を担うものであればと気がついた。後は、論文・報文に対する価値観の醸成である。

Society 5.0 であるとか SDGs であるとか、地域社会の問題に大に関係する課題解決が求められている今日である。さらに、我が国は令和元年という節目を迎えた。さてこの時代はどうあるべきか。パラダイム・シフトというほど大げさではないが、上記のような価値観への転換を考えてよい機会ではなかろうか。この Web ジャーナル B 第 6 号も、そうした手がかりになればと願う。

2019 年 9 月